

平成12年
2月27日（日）

第17回 日本口腔
インプラント学会
九州支部学術大会

プログラム・抄録集

表紙

大会長 羽 生 哲 也

場所 福岡県立福岡勤労青少年文化センター
(ももちパレス)
主管 福岡歯科大学歯科補綴学講座
口腔インプラント科

サイナスリフト、術後の洞内構造

○渡辺孝夫、清水治彦、日高豊彦、岩野清史、
宮崎泉

鶴見大学歯学部第1口腔外科学教室

I 目的

サイナスリフト術は上顎骨側壁の開窓、洞粘膜の挙上、補填材の補填、インプラント植立等の外科的侵襲を加えることから洞内構造物に対し形態的に影響与えることが推定される。現在、我々はサイナスリフト術における各種骨補填材の骨造成に対する影響をみる目的で一連の実験を行っている。今回、これらの実験動物で手術の影響を受けたとみられる洞内構造を集め臨床的な意義を検討してみた。

II 方法

全身麻酔下、雑種成犬の前頭骨を露出した後、左右前頭洞にそれぞれ5×7mm大の骨開窓し、洞粘膜挙上後挙上洞粘膜下空隙を形成した。その後は骨開窓部の脇にブローネマルクインプラントを植立したもの、洞壁を穿孔したもの、各種骨補填材を填塞したもの、など、各種の条件を付与した。所見は前額断したものを肉眼的に、および脱灰標本あるいは非脱灰標本にして組織学的に観察した。

III 結果

1) 対側の洞壁に一部癒着した状態で収縮し幕様構造をとった洞粘膜、2) 補填材が無いところでインプラント体を直接、被覆した挙上洞粘膜、3) 挙上洞粘膜穿孔したインプラント周囲組織、4) 術後6ヶ月で骨閉鎖のみられなかった開窓部、5) 凍結乾燥脱灰骨に対する異物反応、6) 洞壁既存骨を穿孔したインプラント周囲組織、7) 術後1ヶ月前後で消失した手術時の凝血、等が観察された。

IV 考察および結論

サイナスリフト術は骨造成以外にも洞内構造に各種の形態学的影響を与えた。中には臨床的に無視できないものもみられた。